

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和7年6月
第 134 号
毎月 1 日発行

ホームページ



おて LINE



Facebook



ラン活

『ラン活』という言葉を御存じでしょうか。

これは「子どものランドセルをどれにしようか、という親（祖父母）の活動」という意味です。ラン活は、なんと入学の前年の春から始まるのですが、やはり人気商品には予約が殺到するということでしょうか。

今のランドセルは、子どもたちの“扱いの粗さ”に六年間耐えられる丈夫さを追求しつつ、最近では「軽量」「収納量」「背負いやすさ」について、職人の涙ぐましい努力の結晶そのものです。

それに、実に「カラフル」ですね。これについて興味深い動画がありました。

入学を控えお店に『ラン活』にやってきた親子。店には何十色ものランドセルが壁に展示されています。子どもは目を輝かせて店内をめぐります。ここで親は店員に誘導されて別室へ。そして我が子が、どのランドセルを選ぶかをモニタリングします。

ある男の子がやってきました。カメラ越しに母は「多分黒を選ぶと思います。」男の子はやはり黒を選びました。

別の両親は「あんまり明るすぎる色でなければ…でもあとは本人が自由に選べばいいと思います。」こちらも、子どもは落ち着いた色を選び、両親のホッとする顔。

「男だから黒かな」「長い目で見て汚れが目立たない色かな」「ミント色は私（母）も好きだし、娘も好きです」…親の思いと重なるように、子どもたちも次々に「ズバリ」の色を選んでいきます。

ここで満足そうな親御さんにお店から一枚の封筒が渡されました。開けると「選んでもらったのは、子どもたち自身が使いたいランドセルではありません」「親御さんが喜ぶ色を選んでもらいました」とありました。「えっ…」と驚く親御さん。どうりで同じ色を選ぶわけです。子どもの気持ちを分かっているわけではなかったのだという気持ちもあるでしょう。

そしてカードはもう一枚。「次は本当に自分が使いたいランドセルを選んでもらいます」。水色、薄紫、ターコイズブルー、最初に黒を選んだ男の子は何と白。子どもたちの目は、一層輝きます。

この中で、私が最も感動したのは、ピンクを背負った男の子の幸せそうな表情を見た母親が、「…それかわいいと思います」と受け入れたシーンです。

私たちは、相手に幸せを願ったとき、ときどき無意識に「自分の幸せの尺度」を押し付けてしまう存在です。そして、それ自体は、「経験者の知恵」という面で非常に有用であることもあるでしょう。しかし、最も大切なのは「相手の選択を尊重すること」ではないでしょうか。（住職）

いまさら仏教！



【本尊】

本尊と言えば、神仏全般を指すように思われますが、少し違います。

正式には「根本至尊」といいます。意味は「最も尊ばれるもの」です。ここで重要なことは「私にとって」という意味が含まれていることです。

そうなる神仏全般以外にも出てきそうです。例えばお金とか…。

お金が大事なのは全員そうです。そこで、「お金とは別の、もっと重要な価値がありそうなもの」「私の行動基準を根本的に支えてくれるもの」が本尊ですね。今回は、「本尊としての阿弥陀如来」について触れてみたいと思います。



ちょっと あたまの こりほぐし

小さい子どもたちだけで

避難訓練をしたら、いつもけが人も出ずに

スムーズにできます。

なぜでしょうか？

★ヒント：小さい子ども、言い換えると…



ちいさなおんがくかい

日時：六月二十八日（土）十三時三〇分

★うた…城戸宏江さん

ピアノ…酒井優子さん

★広島からお越しいただきます。今回はさらに素敵な選曲、それから、「素敵な楽器」も登場。参加無料。



（おてらの HP）

施設訪問、出来る時に…

★縁あって、現在二か所の施設の入居しているご門徒さんのところに面会に伺っています。面会、というよりも、楽しくおしゃべりに行くような気分です。もしご希望があればおっしゃってください。大変ありがたいです。



ごはん粒には仏がござる

福岡 義朝

現在、本願寺の布教研究課程では、今まで全く仏法を聞いたことが無い方に来て頂いて、研究課程の生徒さんが話す法話を聞いて頂き、本音の感想を語ってもらい、その言葉を聞いて反省、研鑽をする研修をしております。

そこで最も多いご意見は、阿弥陀仏がよく判らないということです。見えないもの・触れることができないものを信じることはできないということです。

「見えるものは納得できるが、見えないものは信頼できない」ということは、現代の科学的立場のようにも思えますが、ほんとうにそうでしょうか。

例えば私達にとって一番大切なものとは生命です。でも、この生命を見た者はおりません。心や愛情も目には見えません。でも、私達には無くてはならないものです。

昔の中国での話です。みんなが「春が来た」と言います。ある男は言いました。

「春ってどこに来ている。見せてみろ」

これには誰も答えられません。やがて男は家に帰り、庭でお茶を飲んでいると、ポン

と梅の花が開きました。その瞬間、男は気付きます。自分はすでに春の中にいたことを。春とは働きです。雪が解けるのも、鳥が囀るのも、花が開くのも、春の働きです。

元岡崎女子短期大学教授の宇野正一さんという方がいらっしゃいます。宇野先生は教育学者であり、また念仏者でも有名な方です。

大正生まれの宇野先生は五才の時、母が亡くなり、母のお父さん、すなわち祖父に育てられます。江戸時代に生まれた祖父は熱心な念仏者でもあり、とても厳格な人でした。その祖父の口癖は「ごはん粒には仏がござる」というものでした。

ですから、正一さんは落としたごはん粒はどこに落ちていても、水で洗って食べさせられました。そんな正一さんはやがて小学校に入り、五年生になった時、学校に顕微鏡が入りました。顕微鏡は当時はとても珍しい物でした。

学校の先生は生徒達に言いました。「明日は顕微鏡で小さなところがどうなっているのかを調べるので、みなさんが見たいなっと思う物を持ってきて下さい」と。

翌日、生徒達は思い思いの物を持って学校に来ました。布切れや、小さな虫や、

花や葉っぱ等。ところが正一さんはごはん粒を持って行きました。おじいちゃんが言っているように、本当に仏様がいるのか見たかったのです。



先生やクラスの子はみんな笑いました。でも正一さんは真剣で、とても大切なことでした。しかし顕微鏡でごはん粒を見ると、そこには仏様は映りませんでした。

正一さんはその日、学校から帰ると、畑に出ている祖父に叫びました。「おじいちゃんのおそつき。ごはん粒の中には仏様なんていなかったぞ」と。祖父は黙っていました。その夜、仏壇の前で祖父は背中を震わせて泣いていたそうです。

やがて正一さんは成長してゆき、哲学、宗教、科学を学び、大人になった時、おじいちゃんの言ったことは真実であったとしみじみ知らされたそうです。

仏様とは働きです。闇で苦しむ私を目覚めさせる働きです。仏様は全てのものの中に働いています。空にも地にも貴方にも私にも。

そして一粒のごはん粒の中にも。

（『赤光3』二〇一九年四月）

お盆参り

参らせていただきます

【期 間】七月～八月十五日

【お勤め】讃仏偈（赤経本64ページ）

御文章

【一軒につき】三十分前後お世話になります

【ことし初盆にあたられる方】

●八月十二日～八月十五日に参らせていただきます

●夜間でも参らせていただきます（お勤め等のご都合に合わせ）

●普段着で構いません

●盆灯籠や盆提灯は、浄土真宗において必ず要る仏具ではありませんが、ご当家で代々伝わるものや、ご親戚が新調してくださることもあると思います。その時はどうぞお気兼ねなくご用意ください。

